

アウグスティヌスにおける靈的被造物の創造の問題

—『創世記』注解を中心に—

河野 一典

I 問題の周辺

われをして聞かしめ理解せしめたまえ。いかにしてあなたは「はじめに天地を造りたもうた」のか。（『告白』第11巻3章5節）

このような言葉で着手されたアウグスティヌスの『創世記』注解は、世界の生成を理解しようとする哲学の根本的な問いを投げかけている。アウグスティヌスの『創世記』注解の作業は彼の世界観を構築していく作業に他ならない。それは一方で「永遠と時間」「質料と形相」というギリシャ哲学の伝統的な概念を用いながら、もう一方で「御言、イエス・キリスト」に代表されるキリスト教の教説に基づくことによって、両者が混然一体となって進められている。すなわち新たなキリスト教的創造論を理論的に構築するために、古代ギリシャ哲学が与えたものを援用し、それを新しい地平に移し変え融和させる作業と言えるかもしれない。しかるにそのことを可能にさせている状況と議論の枠組みはいかなるものであろうか。もとより『告白』第7巻において語られているように、アウグスティヌスにとってプラトン派の書物との出会い、すなわち古代ギリシャ哲学、特に新プラトン主義思想が与えた影響は決定的に重要であった。

本論では、アウグスティヌスのキリスト教的創造論に立脚した世界観の中で、靈的被造物の創造の問題に焦点を当てることによって、靈的被造物が彼固有の創造論においてどのように位置づけられているのか、またその際特に「質料」という従来の哲学的な概念の意味の変容について考えてみたい。

更に以下に取り上げる靈的被造物の叙述は、アウグスティヌスが繰り返し試

みた『創世記』注解の四書¹⁾にわたる論究の紆余曲折を経て出てきたものである。われわれは、その四書を通してアウグスティヌスの思索の深まりと、論点が明確化されていく経過を看取することができるであろう。

II 問題の萌芽

まずアウグスティヌスが『創世記』を解釈する姿勢について確認しよう。『未完の創世記逐語注解』第4章5節²⁾において、アウグスティヌスは聖書解釈の方法として四つのものが伝えられていると語っている。すなわち(1)歴史(2)比喩(3)類比(4)原因論による仕方である。「歴史」は、神的であれ人間的であれ出来事が記述されているとき、「比喩」とは象徴的に語られたと理解されるとき、「類似」とは旧約聖書と新約聖書との一致が証明されるとき、「原因論」とは語られたことや生じたことの原因が答えられるとき、存在する。アウグスティヌスは、この四つの伝統的方法論を、随所にまた任意に用いている。しかしもう一方でアウグスティヌスは聖書の言葉を真実として真摯に受け止める姿勢を決して崩さず、もしそこに理解不可能なことがあれば、率直に己の無知を告白するという仕方でも論述を進める。従って後述する彼の靈的被造物に関する独創的な解釈も、様々な解釈の可能性を探りながら、神の創造の業を理解しようとする思弁の深まりの所産であると言わなければならない。

「はじめに」(Gen.1,1)と言われたのは、「第一のものとして」造られたからなのか。またもし天使たちと全ての英知的な権能が「第一のものとして」造られたならば、被造物の中で第一に天地は造られることができなかつたのか。というのも天使たちもまた神の被造物であり、神によって造られたとわれわれは信じなければならないからである。……³⁾

このテキストにおいて端的に、靈的被造物(天使)の創造を『創世記』冒頭に読み込むことを試みるアウグスティヌスの問題意識の萌芽をみることができ。この箇所は、まず『詩編』を典拠に天使も被造物であること、またそれは被造物の中で最上位のものであるから、第一に造られたとして、『創世記』冒頭の記述の中に天使の創造を読みとる可能性を探っていると思われる文脈であ

る。

さて、もし天使たちが第一のものとして造られたならば、更に次のことが問われうる。天使たちは(1)時間において造られたのか。(2)全ての時間以前に造られたのか。(3)時間のはじめにおいて造られたのか。

もし(1)時間において造られたのなら、天使が生じる以前、既に時間があったことになる。そして時間そのものもまた被造物であるから、時間が存在し始めるためには、天使たち以前に何らかのものが造られたとわれわれは認めなければならない。すると「第一のものとして」という前提に反する。

またもし(3)時間のはじめに天使たちが造られたならば、天使たちとともに時間が始まったことになり、はじめに「天地」とともに時間が存在し始めたという当時一般的であったと思われる解釈の一つに反する。これは「はじめに」(*Gen. 1, 1*)を時間のはじめに、と解釈した場合、引き続く「天地」の名の下に何が意味表示されているか、という問題につながっていくであろう⁴⁾。

『創世記』冒頭に天使の創造を読み込むためには、三者の中では、(2)天使が全ての時間以前に造られたという解釈が正しいと言えよう。しかしながら、もし全ての時間以前に天使たちが造られたならば、いつ時間は創始したかということが更に探求されなければならない。例えば「そして神は言った。天の大空に光体成れ。地上を照らし夜と昼を分け、しるしと時と日と年のためになれ。」(*Gen. 1, 14*)と言われている。すなわちここで、天の光体が秩序ある行程において運行し始めたのだから、その時時間が始まったと見られうるのである。聖書の記述の順序に従って、もし第四日に造られたと言われている光体の運行によって時間が創始されたならば、どうして時間が存在する以前に日々(一日～第三日)が存在しえたのか⁵⁾。

このように「時間はいつ始まったのか」という問題が、一連のテキストにおいて常にアウグスティヌスの念頭にあったと思われる。第四日目の天体の運動以前の三日間は、時間の変遷はなかったのか。天使の思惟の働きには時間的な変遷はないのか、等々である。これは時間と永遠なる神の創造との問題、また『創世記』冒頭に語られていることは時間的に継起したことかどうかという、

「はじめに」(Gen. 1, 1) の多様な解釈の可能性の問題につながっていく。

このような一連の問題の解決は特に『告白』第 11 巻における時間論や第 12 巻における質料論を経て、『創世記逐語注解』第 4 巻において、アウグスティヌスの独創的な解釈を見るに至る。それでは『創世記逐語注解』第 4 巻における靈的被造物の創造に関する記述を見よう。

Ⅲ 『創世記』冒頭における靈的被造物の創造

物體的な光は、大空 (firmamentum) と呼ばれそのうちで光体 (luminaria) も造られた天が生じる (Gen. 1, 14) 以前に、いかなる循環やいかなる進行や退行によって日と夜との変遷を示しうるのか、われわれは見出しえないから、その問題について何も自分の見解を述べずに、見過ごすことはできない⁶⁾。

アウグスティヌスは『創世記逐語注解』第 4 巻 22 章 39 節において、このような書き出しで、『創世記』1 章 3 節の「光」を物體的な光と考えることを完全に止め、靈的被造物の創造に関する独創的な解釈を述べている。それは一連の注解書における『創世記』冒頭の解釈を通して、紆余曲折を経た上での彼の自説の表明であり、アウグスティヌスの創造論を理解する上で極めて重要なものを含んでいる。

最初に造られたかの光 (Gen. 1, 3) が物體的でなく靈的であるならば、ちょうど闇の後に光が造られたように——そこで光は自らのある種の無形性から創造主に向き直り形相づけられたと理解される——夕べの後に朝が生ずるのである。というのも光 (靈的被造物) が神とは同じでない自らの固有の本性を認識した後で、神御自身である光 (イエス・キリスト) を讃えるために自らを帰還させ、その観照によって形相づけられるのである⁷⁾。

アウグスティヌスにとって「光」は靈的被造物が造られたことを意味する。それは第一の最上位の被造物として、無形性から創造主への向き直りによって形相づけられ、二通りの自己認識という知性的被造物として、物體的被造物と全く異なる在り方をしている。

下位に生じる他の被造物は、その光（靈的被造物）の認識なしには生じないから、造られた種々のものどもが区別されるごとに、この同じ日が繰り返され、その繰り返しによって全ての日が生じ、六という数の完全性によって終結する……。従って第一日の夕べは、その光による自らが神ではないという認識であり、他方この夕べの後の朝は——そこで一日が終わり第二日が始まるが——その光の向き直りである。すなわち造られたものを創造主への讚美へと帰還させ、神の御言から自らの後に造られる被造物すなわち大空の認識を受け取るのである。……⁸⁾

この引用箇所は、『創世記』の一日目における靈的被造物の自己認識の二つの在り方が述べられるとともに、同様に引き続く日々において、靈的被造物による朝と夕べの認識なしには他の被造物が生じないと言われている。すなわち御言と靈的被造物と物體的な被造物の関係づけがなされている。次にその関係づけの内容を見よう。

聖なる天使たちは……、常に神の顔を見ており、父に等しいものとしてある神の独り子たる御言を完全に享受している。そしてその天使たちにおいて全てに先立って知恵が造られ、疑いなく、天使たちは自らもその内で第一に造られた被造物全体を、神の御言そのものにおいてより先に知った。それによって全てのものが造られたところの御言において、全てのもの——時間的に造られたものも——の永遠の理念がある。次にそのように知った被造物そのものにおいて、下方に見下ろし、御言を讚美するためにそれを帰還させる仕方で、御言の不変の真理において、それに従って造られたところの理念を天使たちは根原的に見るのである⁹⁾。

天使は全ての被造物に先立って第一に造られた。それは御言に付着する至福の在り方で、御言において自らも含めた全ての被造物の理念を根源的に (principaliter) 見る知性的存在者である。その認識の仕方は『創世記』の記述に即して次のように述べられている。

天使たちは、被造物をその被造物そのものにおいて認識するが、その認識よりも、選びと愛によって、全てのものがそれによって造られたところの

真理において被造物を認識することを好むのである。というのも天使たちは真理に与るものとして造られているから。それゆえ全六日を通して、夜とは名付けられず、夕と朝の後、一日と名付けられ、同様に夕と朝の後第二日と名付けられ、続いて夕と朝の後第三日と名付けられ、こうして第六日の朝にまで至り、そこから神の安息たる第七日が始まる。……至高の聖なる天使たちは、被造物を被造物そのものにおいて認識したことを、神を誉め讃え愛するために、帰還させる。その神において被造物がそれによって造られたところの永遠の理念を観照し、その極めて調和した観照によって、天使たちは一つの日なのである。……¹⁰⁾

以上の記述をまとめると次のようになる。「光成れ」(Gen.1,3)とは、靈的被造物が無形の状態から、形相づけられ創造主へ向き直ったことを意味する。そして最初の一日の「夕べ」(Gen.1,5)が来て、靈的被造物が自らの固有の本性を自己認識する。続く「朝」においては靈的被造物が創造主へ帰還し観照することを意味する。次の「大空成れ……そしてそのようになった」とは靈的被造物が御言(永遠の理念)において大空を認識することである。再び「夕べ」において靈的被造物が大空を、その本性そのものにおいて認識する。また「朝」が来て靈的被造物がその認識を創造主へ帰還させるが、それは引き続き「水」の認識を受け取るためである。このような日の認識が六度繰り返される。

IV アウグスティヌスの『創世記』解釈における四つの論理的な枠組み

われわれは先に、『創世記』注解における、靈的被造物に関するアウグスティヌスの問題意識の萌芽と、『創世記』冒頭の六日間に靈的被造物の創造と認識を読み込む彼の独創的な解釈を概観した。次にこの天使の認識という極めて独創的な解釈に至る上で、アウグスティヌスが『創世記』を解釈する際に念頭においていた論理的な枠組みを整理して考えてみよう。

「はじめに (in principio) 造った」(Gen.1,1)ということは「第一に (primo) 造った」と言われているとしか理解しない人は、もし「天地」を天地の質料、すなわち全被造物の質料、可知的物体的被造物の質料と理

解しなければ、どうして真に「天地」を理解することができようか¹¹⁾。

アウグスティヌスは『告白』第12巻において、『創世記』1章2節「天地」の解釈に着手し、様々な解釈の可能性を取り上げながら、質料について思いめぐらし、「天地」の名の下に質料を読み込む立場について語っている。そして同巻29章40節において、「はじめに」を「第一に」と解釈する説を展開する箇所では、「先行する (praecedere)」の意味を四つに区別している。四つの「先行する」とは、(1)永遠において先行する(2)時間において先行する(3)選びにおいて先行する(4)起原において先行する、の四つである。そして最初と最後の二つを理解することが難しいという¹²⁾。

永遠において先行するとは、神が万物に先立つ場合。時間において先行するとは、例えば花が実先に先立つ場合で、時間的な出来事の生起の順序である。選びにおいて先行するとは例えば実が花に先立つ場合で、価値の上で優れているものが劣ったものより先であるという順序である。起原において先行するとは例えば音が歌に先立つ場合で、質料が形相よりも先であるという創造・製作の順序である。

この四つの「先行する」の秩序は、アウグスティヌスが創世記を解釈する上で、有効に機能していることがわかる。(1)と(2)の先行する秩序に関して言えば、神の創造の業を『創世記』の記述の順序に従って、時間的な出来事の継起とすることは、たちまち矛盾を来し、時にマニ教徒による誹謗の対象となった¹³⁾。アウグスティヌス自身も自問する形で、聖書の記述の順序と事実はどうであったかを試行錯誤しながら論述を進める様子は、テキストに如実に現れている。

(3)「選びにおいて先行する」秩序については、アウグスティヌスが『創世記』冒頭において、第一の被造物として靈的被造物の創造を読み込むことに傾斜し、ひいては Deus は父なる神、principium は御言、イエス・キリスト、Spiritus Dei には聖霊を読みとる有効な秩序として機能していると思われる。なぜならそれらは物的被造物よりも、価値の上ですぐれているという確信がアウグスティヌスにはあったからである。

(4)「起原において先立つ」秩序については、次のことに注意しなければならない。それは人間が音声を集めて言葉を形成するというアナロジーによって説明されているが、ここで言う「起原において先立つ」というのは、そのような被造物における時間的なものではなく、神が質料をも含めて同時に全被造物を創造するという、神の創造の秩序が念頭に置かれているということである。

このような秩序を念頭に置いて、アウグスティヌスが『創世記』における創造の業の六日間を、最終的に霊的被造物の認識内の出来事と見なすに至る。その紆余曲折の経緯において、有効に機能している観点は『創世記』冒頭の「はじめに (in principio)」を巡る解釈の可能性に即して整理することが出来るであろう。そこではギリシャ哲学の系譜における伝統的な概念を援用しながら、それを異なるキリスト教の創造論へ移し変えて論じる過程を浮き彫りにしている。

「はじめに」(in principio) の解釈は次の三点に絞られている。すなわち、i) 時間のはじめに、ii) 第一に、iii) 御言、イエス・キリストにおいて、の三つである。これらの解釈の可能性は、既に『未完の創世記逐語注解』において提示されている所であるが、その解釈がいわば『創世記』の注解という作業を超え、アウグスティヌスの創造論に関する思弁的形而上学的論究にまで発展・深化しているのは、『告白』第 11 巻以降から『創世記逐語注解』においてである。

「時間のはじめ」と解釈する立場については『告白』第 11 巻の「永遠一時間」論が、「第一に」の解釈については、同じく『告白』第 12 巻の「質料一形相」論が内実を与えている。両巻とも、一方でマニ教徒の誹謗に答えるという当初の問題意識を残しながら、徐々に思索の深まりを見せている。それでは「はじめに」の三つの観点に基づいて整理しよう。

i) 時間のはじめに——永遠と時間の論理

アウグスティヌスの『創世記』解釈においては、マニ教からの脱却というモチーフが『マニ教徒を論駁する創世記注解』以来一貫して見られる。『告白』第 11 巻の時間論を論じる契機の一つになったマニ教徒による『創世記』を誹謗する問いがある。「神は天地を造る以前、何をしていたのか。」「もし神が天

地を造る以前、何もしていなかったならば、何故神は以前何もしていなかったように、引き続き常に何もせずにいられたのか。……」「もし造物が存在するように欲する神の意志が永遠であるならば、その永遠の神の意志によって造られた造物は、何故永遠でないのか。」¹⁴⁾

アウグスティヌスにおいて創造主と造物の在り方の峻別は、至る所で永遠と時間とをめぐらる問題に集約される仕方で出現している。「はじめに」を「時間のはじめに」と解釈する立場は、引き続き「天地」が可知的であれ物的であれ全造物を意味しているとする解釈に相関し、それと整合性を与える¹⁵⁾。従って先の問いに対する彼の理解は以下のようになる。

神は全能にして、万物の創造主である。しかるにその神が天地を造る以前、数え切れない世紀にわたり創造をしないでいたかのような問いは無意味である。すなわち天地創造以前、神が無為のまま時間が過ぎ去ったかのように言われているが、われわれは、「天地」の下に全ての時間が含まれていると理解しなければならない。なぜなら時間もまた造物物だからである。従って神が時間を造る以前、時間は過ぎ去ることはなく、存在することもない。時間は造物物とともに始まったのであるから、天地を造る以前を問うことは、その問い自体が迷妄である。

ii) 第一に——質料と形相の論理

「はじめに」を「第一に」(primo)と解釈する立場は、引き続き「天地」が可知的であれ物的であれ造物の質料を意味しているとする解釈に相関し、それと整合性を与える¹⁵⁾。すなわちアウグスティヌスは、質料が形相に先行するという「創造」の秩序の意味で、最初の造物「天地」の名の下に、質料が意味されていても差し支えはないとする。これは前述の4つの「先行する」の意味づけで言えば、(4)「起原において先行する」と言われる秩序である。

さて「起原において」と言われるとき、そこに見出されるのは神という創造主の側からみた、創造或いは形成の秩序である。すなわち神の創造の場合、質料は形相づけられたものに時間的に先立つのではない。神は全造物を同時に永遠の仕方で創造したからである。聖書において語られる際には、あたかも時

間的に先立つかのように語られているが、質料と形相は、非時間的な秩序すなわち創造の論理として用いられているのである。

もっともアウグスティヌスにおいては質料には二つの側面が見出される。第一に『告白』第12巻で詳しく論じられているように、質料は形相が推移する元にある基体（受け皿）として、世界の存在者の複合・合成という内在的な在り方を説明する一方の原理である¹⁶⁾。それはプロティノスはもとより、アリストテレス、ストア派も含めて、ギリシャの伝統的な哲学の共通の理解である。

ところがここで「質料が形相に先行する」という仕方で、『創世記』の記述の整合的な解釈のために「質料」が用いられているとき、アウグスティヌスは神という制作者を明確に指定した創造の秩序を念頭に置いて用いているのである。従ってアウグスティヌスにとって質料とは、先の内在的な可変性の根拠であるとともに、神によって無から造られたという、被造物の被造性そのものを明示する言葉として用いられていると考えられる。それによってマニ教徒の誹謗から『創世記』を擁護するとともに、いわゆるマテリアリズムを克服し、『創世記』の整合的な解釈への道を拓くに至ったのである¹⁷⁾。

先に述べたように質料が形相に先行するという、「起原において先行する」秩序は、創造或いは製作における論理的な秩序である。『知書』11章18節にある「神は世界を無形質料から造った」という言葉をアウグスティヌスは重く受けとめていると思われる。この言葉は、既に『マニ教徒を論駁する創世記注解』以来、彼の『創世記』注解においていわば大前提として、深く刻み込まれているものである。全知全能たる神は全被造物を無から創造した。無から無形質料は造られ、その無形質料から全てのものが造られたのである¹⁸⁾。しかも神は時間的ではなく、永遠にかつ同時に創造したのである。従ってここで言われている「質料」は被造物の被造性の根拠として解釈されているのである。アウグスティヌスは被造物の創造の起原における秩序を、まさにこの質料という言葉を用いて『創世記』の冒頭に読み込んでいる。この点において従来の質料の持つ意味に新たなキリスト教的創造論の観点がもたらされていると思われる。

何が「天地」という名によって意味表示されているのか。……両者〈靈的

被造物と物的被造物〉の無形質料が「天地」と言われたのか、すなわち己の内にありうる仕方で、創造主へ向き直っていない——そのような向き直りによって形相づけられ完成されるが、もし向き直らなければ無形なのである——靈的な生と、他方物的〈質料〉である、ただし視覚であれその他何らかの肉体的な感覚によってであれ、知覚されうる物的な形象が既に存在するとき、形相づけられた質料においてあらわれる全ての物的な性質の欠如によって、それが理解されうるならばのことである¹⁹⁾。

この『創世記逐語注解』第1巻の箇所では、まだ「天地」を靈的物的無形質料の意味で解することに、まだ逡巡があるようである。また最後の条件節は『告白』第12巻において、伝統的な概念としての質料を理解することの困難さが述べられていることに符合する²⁰⁾。しかしここで靈的被造物に関して、質料という伝統的な概念を用いて説明するアウグスティヌスの念頭には、先に述べた創造の秩序の意味があると思われる。靈的被造物における質料とは、まさにそれが造られて存在する被造性を意味する根拠を表す言葉として使われていると理解できるのである²¹⁾。

すなわちアウグスティヌスが一連のテキストで語っている質料と形相は、神が被造物を創造する秩序の論理的・非時間的な説明原理として導入されている。しかも靈的質料に関しては、質料は素材的なものではなく、あくまで可能性としてあり、原因たる神を覲る（神に向き直る）ことによって規定され形相づけられるのである。それはちょうど何も見ていない状態の目が、視覚能力として存在し、何かを見ることによって規定され、色や形になるごとくである²²⁾。この創造の秩序において語られる質料の意味を、更に明確に論じている第三の観点を次に見よう。

iii) 御言、イエス・キリストにおいて——帰還の論理

『ヨハネ福音書』8章25節に次のようにある。

彼ら（ユダヤ人達）はイエスに言った、「あなたは誰か。」イエスは彼らに言った、「始原である、というのは私は君たちに語りもするから」

ここでイエスは、自らを始原と言っていることを典拠に、アウグスティヌス

は『創世記』冒頭の「はじめに (in principio)」を「始原において」すなわち「御言・イエスキリストにおいて」と解釈する立場を提示する。

神の言・御言は神の意志・観念 (ratio) を表している。しかも御言は音声のように時間的な被造物の動きではない。もし時間的な仕方で神が語り、天地を造ったとすれば、天地の存在以前に既に物的被造物が存在していたことになるからである。従って御言は音声ではなく神と等しく永遠の御言である。御言は神の思惟内容としての永遠の観念 (aeterna ratio) を言い表すのである。それ故全ての被造物は、存在し始めるべきであるとか、存在することを止めるべきであると、神の永遠の観念において知られるまさにその時、存在し始めたり存在することを止めたりするのである²³⁾。ここで御言が置き換えられた「永遠の観念」は事物の範型因としてのアイデアを意味する。

更に御言が、イエス・キリストを通して耳に聞かれる仕方語られ、我々が聖書においてそれを読むことが出来ることを、アウグスティヌスは意義深く考えている。始原とは、われわれがそこから存在するところの存在の拠り所であり、われわれが迷うとき、存在の拠り所に立ち返るように、われわれに教えてくれるものであると言われているからである²⁴⁾。

この解釈の重要な意義は、イエス・キリストが『創世記』解釈という創造論の中で位置づけられることによって、彼の「創造論」は疑いなくアウグスティヌスの主要な関心事であった至福論等の人間の魂にかかわる実践的な問題に有機的に連関しているのである。その特徴的なテキストを取り上げよう。それは『創世記』冒頭の「天地」を造るとき、3節の「光」を造るときのように何故「成れ」と言って造らなかったのか、という問いをたて、そこから「天地」ははまだ形相づけられていない無形質料の意味に解する論述を行う箇所である。

……常に父と一体である御言——それによって神は永遠に全てのものを言葉の響きによってでもなく、響きの時間を測る思惟によってでもなく、己と等しく永遠の、己から生まれた知恵の光によって語る——の形相を、最高にして第一に存在するものと似ないである種の無形性によって無に傾いているとき、不完全なものは模倣しない。しかしながら不完全なものが、

常に不変的な仕方であらうと一体である御言の形相を模倣するのは、不完全なものでも、真実に常に存在するもの、すなわち己の存立の創造主への、固有の類の向き直りに応じて、形相を捉え完全な被造物になるときであるから²⁵⁾。

ここで述べられている「御言の形相 (forma uerbi)」という言葉によって、靈的被造物の知性的な在り方に即して、認識対象にして、かつその形相づけの範型として、御言が捉えられている。しかもここでは「模倣する (imitari)」と言われているように、完全な一致ではなく、認識主体とそれが形相づけられる認識対象たる御言とを端的に区別する言い回しがとられることにより、キリスト教的創造論の立場が明確にされていると思われる。

聖書が「神が言った、成れ」と述べていることに関して、われわれは神と等しく永遠で、不完全な被造物を自らへと呼び戻す (revocare) 御言の本質において、神が言ったことは非物体的であると理解する。それは無形のままではなく、秩序によって生じる個々のものに即して形相づけられるためである²⁶⁾。……その向き直りと形相づけによって、被造物は固有の仕方であらうと神、すなわちそこでは子と父とは一なるものである完全な類似と等しい本質によって、常に父に付着している神の子を模倣するが、他方もし被造物が創造主から背反し、無形で不完全のままであるならば、被造物はこの御言の形相を模倣しない。それゆえ子についての言及は、「はじめに神は天地を造った」と言われているとき、御言であるからではなく、ただ始原であるからなされているのである。というのもここではまだ、被造物の始まりが、不完全なものの無形性において暗示されているから²⁷⁾。

V 結 び

このように「はじめに」をめぐる三つの解釈を有機的かつ整合的に関連させながら、アウグスティヌスは、『創世記』冒頭に靈的被造物の創造を読みとる。そこでは伝統的な概念を援用しながら、キリスト教的創造論を形而上学的に基礎づけるとともに、先述のごとく靈的被造物がその存在の拠り所である始原

(principium) に帰還していく構造の中で、われわれに語りかけ、われわれを呼び戻す御言、イエス・キリストを、被造物が向き直り形相づけられるための道として積極的に意味づけている。その意味でアウグスティヌスにおける「創造」は、自然学的な意味を超え、豊かな実りをもたらす種子を孕んでいるのである。もとより拙論では『創世記』冒頭の六日間、霊的被造物の創造に限って論述を進めてきたが、アウグスティヌスにとって霊的被造物は、明らかに人間の魂の至福の状態の雛形として考えられている²⁸⁾。人間の魂もまた霊的被造物なのである。そして最上位たる霊的被造物の創造（形相づけ）によって、人間の魂、ひいては被造物全般にまで、それらが神によって造られた限り、それ固有の仕方、階層的に、向き直り (conuersio) 或いは帰還 (referre) という上昇の構造をもつ世界像が看取されるのである。

注

1) 拙論において視野に入れた一連の『創世記』注解書は以下の通りである。【マニ教徒を論駁する創世記注解】 *De Genesi contra Manichaeos* (388-390)。【未完の創世記逐語注解】 *De Genesi ad litteram, liber imperfectus* (393-394)。【告白】 *Confessiones* (397-c.400)。【創世記逐語注解】 *De Genesi ad litteram* (401-)。

2) *De Gen. ad lit. lib. imperf.*, 2, 5.

Quatuor modi ... traduntur secundum historiam, secundum allegoriam, secundum analogiam, secundum aetiologiam. Historia est, cum sive divinitus, sive humanitus res gesta commemoratur. Allegoria, cum figurate dicta intelliguntur. Analogia, cum Veteris et Novi Testamentorum congruentia demonstratur. Aetiologia, cum dictorum factorumque causae redduntur.

3) *De Gen. ad lit. lib. imperf.*, 2, 7.

An ideo In principio dictum est, quoniam primum factum est? An non potuit inter creaturas primum fieri caelum et terra, si Angeli et omnes intellectuales Potestates primum factae sunt? Quia et Angelos creaturam Dei, et ab eo factos credamus necesse est. Nam et Angeros enumeravit propheta in centesimo quadagesimo octavo psalmo cum dixit: Ipse iussit, et facta sunt; ipse mandavit, et creata sunt.

4) *Ibid.*

Sed si primum facti sunt Angeli, quaeri potest utrum in tempore facti sunt, an ante omne tempus, an in exordio temporis. Si in tempore, jam erat tempus antequam

Angeli fierent ; et quoniam etiam tempus ipsum creatura est, incipit necesse esse ut aliquid priusquam Angelos factum accipiamus. Si autem in exordio temporis factos dicimus, ut cum ipsis coeperit tempus, dicendum est falsum esse quod quidam volunt, cum caelo et terra tempus esse coepisse.

5) *Ibid.* 2, 8.

Si autem prius quam tempus, Angeli facit sunt quaerendum est quomodo dictum sit in consequentibus: Et dixit Deus, Fiant luminaria in firmamento caeli, ut luceant super terram, et dividant inter noctem et diem ; et sint in signa, et tempora, et dies, et annos. Hic enim potest videri tunc coepta esse tempora, cum caelum et luminaria caeli ordinariis itineribus currere coepissent : quod si verum est, quomodo potuerunt dies esse antequam tempus esset, si a cursu luminaria tempus exorsum est, quae quarto die dicuntur esse facta ?

6) *De Gen. ad lit.* IV, 22, 39.

Sed quoniam lux corporalis, antequam fieret caelum, quod firmamentum uocatur, in quo etiam luminaria facta sunt, quo circuitu uel quo processu et recessu uices diei et noctis exhibere potuerit, non inuenimus, istam quaestionem relinquere non debemus sine aliqua nostrae prolatione sententiae,

7) *Ibid.*

ut, si lux illa, quae primitus creata est non corporalis sed spiritalis est, sicut post tenebras facta est, ubi intellegitur a sua quadam inormitate ad creatorem conuersa atque formata, ita et post uesperam fiat mane, cum post cognitionem suae propriae naturae, qua non est quod Deus, refert se ad laudandam lucem, quod ipse Deus est, cuius contemplatione formatur.

注7)～10)において「帰還」と訳した下線部 referre は、意味的には自らの固有の本性を認識し、それを御言における理念に照合するという、上位の認識に上昇させるという意味で考えられる。この点について中世哲学会において、森泰男、中川純男、片柳榮一、水落健治の諸先生方から貴重な御教示をいただいた。厚く感謝申し上げます。

8) *Ibid.*

Et quia ceterae creaturae, quae infra ipsam fiunt, sine cognitione eius non fiunt, propterea nimirum idem dies ubique repetitur, ut eius repetitione fiant tot dies, quotiens distinguntur rerum genera creatarum, perfectione senarii numeri terminanda : ut uespera primi diei sit etiam sui cognitio non se esse, quod Deus est, mane autem post hanc uesperam, quo concluditur dies unus et inchoatur secundus conuersio sit eius, quia id, quod creata est, ad laudem referat creatoris et percipiat de uerbo Dei cognitionem creaturae, quae post ipsam fit, hoc est firmamenti :

9) *Ibid.* IV, 24, 41.

Quapropter, cum sancti angeli, quibus post resurrectionem coaequabimur, si uiam—quod nobis Christus factus est—usque in finem tenuerimus, semper uideant faciem Dei uerboque eius unigenito filio, sicut patri aequalis est, perfruantur, in quibus prima omnium creata est sapientia, procul dubio uniuersam creaturam, in qua ipsi sunt principaliter conditi, in ipso uerbo Dei prius nouerunt, in quo sunt omnium, etiam quae temporaliter facta sunt, aeternae rationes, tamquam in eo, per quod facta sunt omnia, ac deinde in ipsa creatura, quam sic nouerunt, tamquam infra despicientes eamque referentes ad illius laudem, in cuius incommutabili ueritate rationes, secundum quas facta est, principaliter uident.

10) *Ibid.* IV, 25, 42.

Quia ergo angeli creaturam in ea ipsa creatura sic sciunt, ut ei scientiae electione ac dilectione praeponant, quod eam sciunt in ueritate, per quam facta sunt omnia, participes eius effecti, ideo per omnes sex dies non nominatur nox, sed post uesperam et mane dies unus, item post uesperam et mane dies secundus, deinde post uesperam et mane dies tertius ac sic usque in mane sexti diei, unde incipit septimus quietis Dei, cum sublimes et sancti angeli id, quod creaturam in ipsa creatura nouerunt, referunt ad illius honorem et amorem, in quo aeternas rationes, quibus creata est, contemplantur eaque concordissima contemplatione sunt unus dies,

11) *Conf.* XII, 29, 40.

At ille, qui non aliter accipit : in principio fecit, quam si diceretur : primo fecit, non habet quomodo ueraciter intellegat caelum et terram, nisi materiam caeli et terrae intellegat, uidelicet uniuersae, id est intellegibilis corporalisque creaturae.

12) *Ibid.*

.... cum uero dicit primo informem [materiam], deinde formatam [fecit deus], non est absurdus, si modo est idoneus discernere, quid praecedat aeternitate, quid tempore, quid electione, quid origine : aeternitate sicut deus omnia ; tempore, sicut flos fructum ; electione, sicut fructus florem ; origine, sicut sonus cantum. cantus est formatus sonus et esse utique aliquid non formatum potest, formari autem quod non est non potest ? sic est prior materies quam id, quod ex ea fit, non ideo prior, quia ipsa efficit, cum potius fiat, nec prior interuallo temporis.

13) 注 14) 参照。

14) *Conf.* XI, 10,12. 拙論「『創世記』冒頭をめぐるマニ教徒の問いの意味について—Augustinus, *Confessiones* XI, 10, 12—」『中世哲学研究』第 7 号 (京大中世哲学研究会編) 1988, pp. 61-65 参照。

15) 「はじめに」と「天地」の解釈の相関関係については拙論「アウグスティヌスにおける靈的資料の問題」『中世思想研究』第 33 号, 1991, pp. 98-109 参照。

16) E.g. *Conf.* XII, 5, 5., 6, 6., 8, 8. etc.

17) Cf. *De Gen. cont. Man.* I, 3, 5.

18) *De Gen. cont. Man.* I, 5, 9., 6, 10.

19) *De Gen. ad lit.* I, 1, 2

Et quid significetur nomine caeli et terrae? ... An utriusque informis materia dicta est caelum et terra, spiritalis uidelicet uita, sicut esse potest in se, non conuersa ad creatorem—tali enim conuersione formatur atque perficitur; si autem non conuertatur, informis est—corporalis autem, si possit intelligi per priuationem omnis corporeae qualitatis, quae adparet in materia formata, cum iam sunt species corporum siue uisu siue alio quolibet sensu corporis perceptibiles?

20) *Conf.* XII, 5, 5.

21) 質料を理解する上で、その受容性、可変性に関してはプロティノス『エネアデス』第2論文集第4論文との思想的連関が見られることは、従来指摘されているとおりである。しかしながらプロティノスの発出論の最下位に属する意味での質料の性格、物体のまだ下位に属する意味での質料の固有性をアウグスティヌスの靈的・知性的被造物に帰することは、彼の世界像において構造的にも難しいという印象をもつ。というのもアウグスティヌスは靈的被造物を明らかに被造物の内で最上位に置いているからである。むしろ『創世記』解釈という文脈の中で、仮に質料という言葉を靈的被造物に帰しても差し支えない観点があったと思われる。

22) この比喩は『エネアデス』第5論集第3論文第11章による。そしてそこでは英知とかの者・一者との関係で言われている。知性的存在者の在り方について新プラトン主義との類似が見られるであろう。

23) *Conf.* XI, 8, 10.

.... nisi quia omne, quod esse incipit et esse desinit, tunc esse incipit et tunc desinit, quando debuisset incipere uel desinere in aeterna ratione cognoscitur, ubi nec incipit aliquid nec desinit.

24) *Ibid.*

et ideo principium, quia, nisi maneret, cum erraremus, non esset quo rediremus. cum autem redimus ab errore, cognoscendo utique redimus; ut autem cognoscamus, docet nos, quia principium est et loquitur nobis.

25) *De Gen. ad lit.* I, 4, 9.

An cum primum fiebat informitas materiae siue spiritalis siue corporalis, non erat dicendum: Dixit Deus: fiat, quia formam uerbi semper patri cohaerens, quo sempiternae dicit Deus omnia, neque sono uocis neque cogitatione tempora sonorum uolente, sed coaeterna sibi luce a se genitae sapientiae non imitatur imperfectio, cum dissimilis ab eo, quod summe ac primitus est, informitate quadam tendit ad

hihilum, sed tunc imitatur uerbi formam semper atque incommutabiliter patri cohaerentem, cum et ipsa pro sui generis conuersione ad id, quod uere ac semper est, id est ad creatorem suae substantiae, formam capit et fit perfecta creatura?

26) *Ibid.*

Vt in eo, quod scriptura narrat : Dixit Deus : fiat, intellegamus Dei dictum incorporatum in natura uerbi eius coaeterni, reuocantis ad se imperfectionem creaturae, ut non sit informis, sed formetur secundum singula, quae per ordinem exequitur.

27) *Ibid.*

In qua conuersione et formatione quia pro suo modo imitatur Deum uerbum, hoc est Dei filium semper patri cohaerentem plena similitudine et essentia patri, qua ipse et pater unum sunt, non autem imitatur hanc uerbi formam, si auersa a creatore informis et imperfecta remaneat, propterea filii commemoratio non ita fit, quia uerbum, sed tantum, quia principium est, cum dicitur : in principio fecit Deus caelum et terram ; exordium quippe creaturae insinuat adhuc in formitate imperfectionis.

28) E.g. *Conf.* XII, 11, 12-14., *De Gen. ad lit.* IV, 24, 41. etc.